

自閉症スペクトラム障害者の自己に関する研究動向と課題

滝 吉 美知香*

田 中 真 理**

自己は、他者との関係性の中でこそ形成され得るが、他者との関係性に特異性を示す自閉症スペクトラム障害(以下 ASD)者の自己はいかなる様相を示すのか。本研究では、ASD 研究の歴史的流れの中で、他者との関係性の特異性がどのように扱われてきたのかという点をふまえ、ASD 者の自己に関する研究動向と課題を探った。客体的自己における想起的自己および概念的自己を基準として、想起的自己は、意味的記憶およびエピソード記憶の観点から、概念的自己は、自己に対する価値づけや自尊心など評価的側面を定量的に測定した研究と、自己に対する理解という認知的側面を質的な分析により検討した研究について、先行研究を概観した。その結果、ASD 者は想起的自己と概念的自己とのつながりに脆弱性があることが示唆され、過去の体験や出来事を振り返り意味づけする心的作業を支援していくことの重要性が示された。

キーワード：自閉症スペクトラム障害・自己

1. はじめに

自閉性障害を世界で初めて研究報告した Kanner (1943) は、取り上げた11事例に共通する状態を「極端な自閉的孤立 (extreme autistic aloneness)」と表現した。日本語で自閉と訳されるこの autism は、本来、精神分裂病¹における症状のひとつを示す言葉であり、現実との生き生きとした接触が喪失されている状態を指す (Minkowski, 1953)。つまり、他者との関係を排除し自分自身の中に閉じているという意味であり、このような由来から、自閉性障害が自己と他者との関係の特異性に根源をおく障害であることが示唆される。

自己 (self) とは、Mead (1934) によれば、社会的な経験や活動の過程で生じるものであり、その過程において他者との関係形成の結果として発達する。他者を自己にとっての対象としてとらえることと同様、自分自身をも対象としてとらえることによって、他者の態度を自分自身の中に採用し、他者が行為するように自分自身を意識化する中で行為を行うことで、自己が形成されていく。つまり、他者の行為、言葉、姿勢、思想などを自己の中に取り入れ、自分自身の振る舞いを意識的にを行い、調整することにより、自己が発達していくといえる。言い換えれば、自分自身についての理解を深

*教育学研究科 博士研究員／教育研究支援者

**教育学研究科 准教授

めるためには、他者との関係性が必要不可欠であるといえる。

自己についての理解は他者との関係性の中でこそ促進される一方、その多様性や定義のしにくさから、他者との関係性については自己の発達に関する先行研究の中で実証的に検討されることはほとんどなかった (Goossens & Phinney, 1996)。しかし、近年ようやく、他者との関係性の視点から自己の発達をとらえ直そうとする試みが、アイデンティティ研究領域で注目を浴び始めた。つまり、これまでの研究では、自己の確立という点から、個人内での変化や発達に重点が置かれていたのに対し、他者との関係性に基づく自己が生涯にわたり発達していく様相をとらえようとする試みが、近年増加傾向にある (岡本, 2002)。そのような中、杉村 (1998) は、アイデンティティの形成を「自己の視点に気付き、他者の視点を内在化すると同時に、そこで生じる両者の視点の食い違いを相互調整によって解決するプロセス」とし、その実際の作業は「人生の重要な選択を決定するために、他者を考慮したり、利用したり、他者と交渉することにより問題解決していくこと」と定義した。自己の形成は、他者との相互交渉的なやりとりを通して、発達的に形成され得るといえる。

他者との関係性の中で自己が形成されるのであれば、関係性の特異性に根源をおく自閉性障害をはじめとする自閉症スペクトラム障害 (Autistic Spectrum Disorder、以下 ASD) 者は、どのような自己の形成を示すのか。このことについて示唆を与えてくれるものとして、近年多く出版されるようになった、ASD 者自身による自叙伝 (Grandin & Scariano, 1986; 森口, 2002; Williams, 1992 など) があげられる。そこには、彼ら・彼女ら自身しか感じ得ない貴重な世界が、実体験に基づき主観的・回想的に綴られている。それらの自叙伝によれば、幼年期の ASD 者は、周囲にいる他者の存在を不規則に動く数々の「もの」としてしか認識していない感覚や、顔の見分けがつかない他者に突如として自分の世界を邪魔される感覚を持っているという。また、児童期になると、学校や習い事、クラブ活動などで団体行動を体験する中、周囲のみんなと同じように振る舞わなければならないというルールを徐々に理解しながらも、同時に、そうできない自分自身を感じ始める。そのような ASD 者は、周囲からいじめやからかいの対象とされ、保護を求めた教師や親からも、彼ら自身がどうしようもない問題児として扱われることによって、悲しみや苛立ちを募らせる。そのような体験の積み重ねが、思春期・青年期には、「自分は普通の人とは違う」、「自分は変だ」「自分は一体何者なのか」などのような、自分自身へ向けた違和感や不安、疑問としてあらわれるようになる。どの自叙伝にも、ASD 者が他者との関係性の構築に対する苦手を抱えながらも、必死で周囲に適応しようとし、自己を確立しようと懸命に生きる姿が映し出されている。

思春期・青年期になった ASD 者が、他者との関係性の中での自己に対して意識を強く持ち始めることは、Kanner (1943) から約 30 年後の追跡研究 (Kanner, Rodrigues, & Ashenden, 1972) でも以下のように記されている。「11 名の子どもたちは、同じ段階を通過した。著しい変化は、彼らが 10 代前半から半ばになってから起きた。他の大部分の自閉性障害児と異なり、彼らは自分たちの特異性を不安げに気にするようになり、それについて何とかしようと意識的に努力するようになった。この努力は彼らの成長に伴ってますます大きくなった。彼らは、突如として、若者は友達を持つべきであるということを知ったのである。(pp29-30)」このような ASD 者の傾向は、現在でも数多く

の実証的研究や、詳細な観察データに基づく経験的記録を通して示されている(Hobson, 1993; Capps, Sigman, & Yirmiya, 1995; Wing, 1996; 杉山・辻井, 1999; Bauminger, Shulman, & Agam, 2004; 別府, 2007)。

これらのことから、ASD者に特有の自己の発達における特徴的な段階のひとつとして、思春期・青年期になると、幼少期から示し続けてきた他者との関係を構築する上での自分自身の特異的な行動や感覚を認識するようになり、そのような自分自身に対する違和感や疑問、不安を抱くようになることがうかがわれる。他者との差異に敏感になることや、自己の存在について考えることは、アイデンティティの確立に向けた基盤となる意識といえよう。杉村(1998)によるアイデンティティの形成に関する定義に基づくと、ASD者は、他者との相互調整や相互交渉に困難を示すことから、「自分は何者か」という問いに対する答えを見つけることは彼らにとって容易ではなく、他者との関係性の中で自己を理解することが難しいと考えられる。

以上より、彼らの障害が自己と他者との関係性の特異性に根源をおくものであるからこそ、ASD者の自己理解を他者との関係性の視点から明らかにする必要がある、そのうえで彼らに対する支援を考えることが重要であるといえる。そのために、本研究では、まず、自閉性障害の原因論の変遷や診断基準の改定など歴史的な背景の中で、他者との関係性の障害がどのように扱われてきたのかを概観したうえで、ASD者の自己に関する先行研究の動向と課題を探る。

2. ASD者における他者との関係性の障害に関する研究の歴史的背景

2-1. 原因論の変遷

世界で初めて自閉性障害を報告した Kanner (1943) は、自閉性障害の中核に他者との関係性における障害が位置し、それが生来的であることを、以下のような表現によって示唆した。「子どもたちの顕著な“病徴的(Pathognomonic)”基本的障害は、人生の初めから(from the beginning of life)、人々や状況に対して、通常の様子で彼ら自身を関係づけられないこと(inability to relate themselves to people and situations)である(p33)」、「子どもたちが人生の初めから孤立を示すことを考えれば、その全体像を特に両親と子どもたちとの初期的な関係に起因させることは難しい(p42)」、「他の子どもたちが生来的に身体的あるいは知的なハンディキャップをもって生まれてくると同様に、自閉性障害の子どもたちは、通常の、生物学的に与えられた、人々との情動的なやりとりを形成する能力を生来的に欠いた状態で生まれてくると仮定すべきである(pp42-43)」(Kanner, 1943)。にもかかわらず、以降1960年代にかけては、自閉性障害を環境的な要因による後天的な障害であるとする見方が中心であった。このことは、当時、精神分析学が主流であったことから、自閉性障害は精神分裂病との関連でその異同が様々に議論されたこと(高木, 2009)や、Kanner (1943)による詳細な事例報告の中でも特に、両親の性格に関する、几帳面、強迫的、情緒的な冷たさなどの特徴的記述が目されたことなどが背景に考えられる。精神分析的視点から自閉性障害における環境的・後天的な要因を説いた代表として、Bettelheim (1967)があげられる。彼は、親の否定的な養育態度や不適切な養育環境により、子どもが他者との関係性を築きにくくなる、つ

まり自閉性障害になるとし、絶対的受容に基づいたかわりによって症状を改善させることを試みた。その効果は一部において認められ、症状が改善した場合は治療の効果とされたものの、その一方で、改善されない場合は親の問題とされたことや、親の経済状況によっても治療内容が変化したことなどから、一貫した効果は確認されなかった (Wing, 1997)。

その後、1970年前後には、自閉性障害が環境的・後天的な障害ではなく、器質的・先天的な障害であるとする説へと転換した。疫学的調査が実施されるに伴い、自閉性障害における言語的、認知的な側面に焦点が当てられるようになってきたことが、その背景に考えられる。Lotter (1966) は、イギリスのある郡において、8～10歳の子ども約78000人を対象に、自閉性障害の特徴的行動に関する24項目(例えば、「つま先歩きをする」「エコラリア(反響言語)がみられる」「物を秩序立てたり並べたりする」など)の調査を行った。その結果、1万人に4.5人の割合で、自閉的な傾向を示す子どもが存在すること、その発症率は、2.6対1で男子が女子よりも高いことなどを明らかにした。そのような疫学的データの展望を通して、自閉性障害と精神分裂病とは、男女比、家族の病歴、本人の知的水準、認知のパターン、妄想や幻覚の存在などの違い (Rutter, 1968) や、発症時期、診断の基準の違い (Kolvin, 1971) などが明らかにされた。このようにして、自閉性障害を環境的・後天的な障害とみなす心因説は否定されるようになったのである。

このような流れの中で、Rutter (1968) は、自閉性障害の一次的障害は言語的な認知プロセスの障害であり、それによって引き起こされる二次的な障害として、他者との関係性における障害を位置付けた。しかし、その後の研究によって、言語障害を有する者が必ずしも他者との関係性における障害を示すわけではないこと (Bartak, Rutter, & Cox, 1977; Cantwell, Baker, Rutter, & Mawhood, 1989) や、高い言語能力を有しながらも、他者との関係性における障害を示す者が存在すること (Rumsey, Rapoport, & Sceery, 1985) などの事実が明示された。つまり、自閉性障害者における社会性の障害は、言語障害のみでは説明がつかないことが明らかにされたのである。

そのような時期に、別の認知的側面から自閉性障害者の主要症状を説明しようとする「心の理論 (Theory of Mind)」欠損仮説 (Baron-Cohen, Leslie, & Frith, 1985) が登場し、大きな注目を浴びた。これは、他者との関係性の構築や維持の難しさを、「他者の心的状態を推測する難しさ」に起因させる説である。代表的な課題に、他者が事実とは異なる誤った信念を持つことに対する理解を問う「誤信念課題 (False Belief Task)」があり、自閉性障害者の多くがこの誤信念課題に失敗する。しかし、一方で、必ず一定の割合で通過する者が存在するという事実も明らかにされてきた (Baron-Cohen et al., 1985; Perner, Frith, Leslie, & Leekam, 1989)。Bowler (1992) は、自閉性障害者の中でも言語能力の高い者は高次の誤信念課題を通過するが、日常生活の対人関係では依然奇異な行動がみられると指摘した。Happé (1994) もまた、日常的なコミュニケーションでよく用いられる比喩的言い回しや冗談、嘘、皮肉といった、字義通りではない意味を含んだストーリー課題を用いて調査を行い、心の理論を獲得した自閉性障害者であっても、課題の解釈には独特さを有し、日常では他者との関係性に関する理解に障害を示すことを指摘した。心の理論に関する問題点として、木下 (1995) は、自己でも他者でもない無人称的な表象の理解を「心的状態の理解」とみなしていることを指摘す

る。つまり、他者の心そのもの、あるいは心を持つ他者その人をどのように理解しているのかという点については、心の理論では明確にされていない。自己の形成が、他者との相互作用の中で行われていくことを考慮すると、心の理論課題の達成は、自閉性障害者が他者との関係性の中で自己を形成していく過程を十分に説明し得ないことになる。

そこで、心の理論課題の達成よりも前の段階に、自閉性障害者の他者との関係性における特異性をとらえる視点として、ジョイント・アテンション (Joint Attention) 行動が注目される。ジョイント・アテンション行動とは、他者に対してある対象を指差したり、または対象を見せたりするようなジェスチャーの使用と理解を示す行動であり、その対象と他者とに交互に視線を向けるようなアイコンタクトを含む (Mundy, Sigman, & Kasari, 1990)。定型発達では、生後10～12カ月頃までに発現する (Leung & Rheingold, 1981) のに対して、同年齢の自閉性障害者はこのような行動を示さないことが指摘されている (Loveland & Landry, 1986)。ジョイント・アテンション行動は、他者との関係性の中での自己という点からも、重要な意味を持つ。すなわち、自己が注意を向けている対象に他者がどのような態度を向けているかを知ることによって、自己と他者とは、共通した対象に異なった価値を与える場合があることに気づき、対象と人との関係、および、他者と自己との距離について理解していくようになる (Hobson, 1993) のである。別府 (1996) は、自閉性障害者におけるジョイント・アテンション行動に関して、一定の発達水準に達することで、指差しによる対象指示機能の理解と応答が可能になるが、応答後に、指差しや発声を伴って再び指差しをした他者を見るような、注意を共有したことを確認する共有確認行動が自閉性障害者にはみられないことを指摘した。このような自閉性障害者におけるジョイント・アテンション行動を検討する先行研究によって、自閉性障害者が指差しなどの表象的な認知能力に障害はないことが明らかにされた一方、彼らの障害の根底には、他者との情緒・情動的なつながりの希薄さが存在することが示されてきた。情緒・情動的側面の障害を自閉性障害者における基本症状として仮定する立場は、自閉性障害者に対して、他者との相互的なやりとりの中で情緒・情動的な体験を促進する支援の有効性を支持することから、非常に臨床的意義が高いと考える。

自閉性障害者の情緒・情動的側面に着目することの意義は、最新の脳科学研究の分野でも指摘される。近年の脳撮像実験は、他者の言動や表情からその状態や感情を読み取り、自分自身の状態や感情として感じさせるミラーニューロンシステムの生物学的な仕組みが、人間の発達において、他者の感情に共感する能力と、他者との関係性を構築・維持する能力とを形成する土台となることを実証的に示してきた。自閉性障害者の場合、このミラーニューロンシステムの障害が明らかにされていることから、他者との情緒・情動的やりとりを促進し、発展させるための支援の重要性が唱えられているのである (Iacoboni, 2008)。

2-2. 診断基準の改定

自閉性障害の原因論に関する歴史的な変遷と相まって、自閉性障害の診断基準についてもこれまで何度かの改訂が行われてきた。1980年、アメリカ精神医学会 (American Psychiatric Association,

以下 APA) が作成した精神疾患の診断基準 DSM (Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders)-Ⅲに、幼児自閉症 (Infantile autism) という言葉が初めて登場し、その上位概念に広汎性 (全般的) 発達障害 (Pervasive Developmental Disorders, 以下 PDD) という言葉が記載された。1980年に初登場した背景には、それ以前の1940～60年代にかけては、上述したように、自閉性障害は小児精神分裂病 (Childhood Schizophrenia) との関連で考えられていたことがある。

その後、1987年に改訂された DSM-Ⅲ-R では、自閉性障害の操作的診断項目として、「対人的相互反応の質的な障害」とともに、「コミュニケーション (言語的および非言語的意思伝達や想像上の活動) の質的な障害」、「行動、興味、および活動の限定」が設定された (APA, 1987)。このような診断項目変更の背景には、疫学的な調査研究の増加に基づき、自閉性障害の概念の拡大と明確化が行われてきたことが考えられる。例えば、Wing & Gould (1979) は、ロンドンのある地区で、身体障害、知的障害、行動障害の子ども 914名を対象として、「社会的相互作用」、「言語・非言語的コミュニケーション」、「反復・常同的行動」の3点について調査を行った。その結果、これらの指標の一部にでも障害のある子ども 132名のうち、58名は対人的なやりとりが可能な重度の知的障害であり、74名は対人的やりとりの障害 (話し言葉や象徴遊びの欠如、興味・関心の限局や反復・常同的行動を示すこと) があることを報告した。Wing & Gould (1979) は、この74名中17名が Kanner の定義に合致した自閉性障害であり、それ以外は Kanner の定義には合致しないものの同様の特徴を併せ持つことを指摘した。そして、それらの子どもたちを、①社会的孤立 (Social aloofness) 群、②受動 (Passive interaction) 群、③積極奇異 (Active, but odd interaction) 群の3つのサブタイプに分類した²。このことによって、自閉性障害の概念はより広範な連続体 (continuum) によってとらえられることとなった。後に Wing は、この連続体を ASD という用語で呈し、「社会的相互作用」、「コミュニケーション」、「想像力」の障害の3つ組 (Triad of impairment) で定義したうえで、アスペルガー障害もこの ASD の中に含まれると位置付けた (Wing, 1991)。アスペルガー障害とは、Asperger によって1944年に報告された自閉的精神病質 (Autistischen Psychopathen) を指す。Kanner (1943) の症例報告と同時期の報告であったにもかかわらず、Wing による提唱まで、Asperger (1944) が注目を浴びることがなかったその背景には、両者の相違点に関する主張 (Van Krevelen, 1971) や、第二次世界大戦の影響³ (杉山, 1999) などが考えられている。

このような経緯を経て、現在の最新版診断基準である DSM-IV-TR (APA, 2000) には、前述した3つの操作的診断項目 (「対人的相互反応の質的な障害」、「コミュニケーション (言語的および非言語的意思伝達や想像上の活動) の質的な障害」、「行動、興味、および活動の限定」) に当てはまる行動様式を示す一連の症候群である PDD として、自閉性障害をはじめ、レット障害、小児期崩壊性障害、アスペルガー障害、特定不能の広汎性発達障害 (非定型自閉症を含む) などの障害が定められている。また、アスペルガー障害は、診断項目のうち「コミュニケーション (言語的および非言語的意思伝達や想像上の活動) の質的な障害」がみられないものとして定義されている (APA, 2000)。

以上より、ASD の診断基準は、1980年代後半より、他者との関係性における特異性が中核的な項目として具体的に制定されるようになり、そのような診断項目に該当する状態像の多様性は、徐々

に広がりつつあるように思われる。

3. ASD 者における自己に関する先行研究の動向と課題

3-1. ASD に関する先行研究の中での位置づけ

Autism または PDD をキーワードに PsycINFO Database (1806 to current) を検索すると、18489本の文献が該当し、そのうち self⁴ をキーワードに含むものは195本(全体の1.05%)であった。年代別にまとめると (Figure 1)、ASD 者の自己が注目され始めたのは1990年代以降であることがうかがわれる。また、ASD 者の自己に関する先行研究の内容を検討し分類した結果を Figure 2 に示す。1970～80年代は、「鏡映自己」や「自己モニタリング」などについての検討が多い。この時期は、ASD 者の中核症状について言語障害仮説や心の理論欠損仮説が主流となっていた時期でもあることから、ASD 者の認知的側面に注目が集まっていたと推察される。その後、1990年代以降、「自己評価」「自己理解」「記憶」などの側面から ASD 者の自己について検討する研究が増加する。1990年代は ASD 者の情緒・情動的側面に焦点が当てられ始めた頃である。自己は他者とのやりとりの中で形成され得るからこそ、ASD 者が対人面において示す情緒・情動的側面の障害が、彼ら・彼女らの自己の形成にどのような影響を与えるかという点が注目を浴びたのであろう。さらに、2000年以降は、医療的技術や機器の発展による「脳科学」的視点からの自己についての検討や、二次障害としての「うつ・不安」などの側面から自己について検討する研究がみられるようになってきたといえよう。

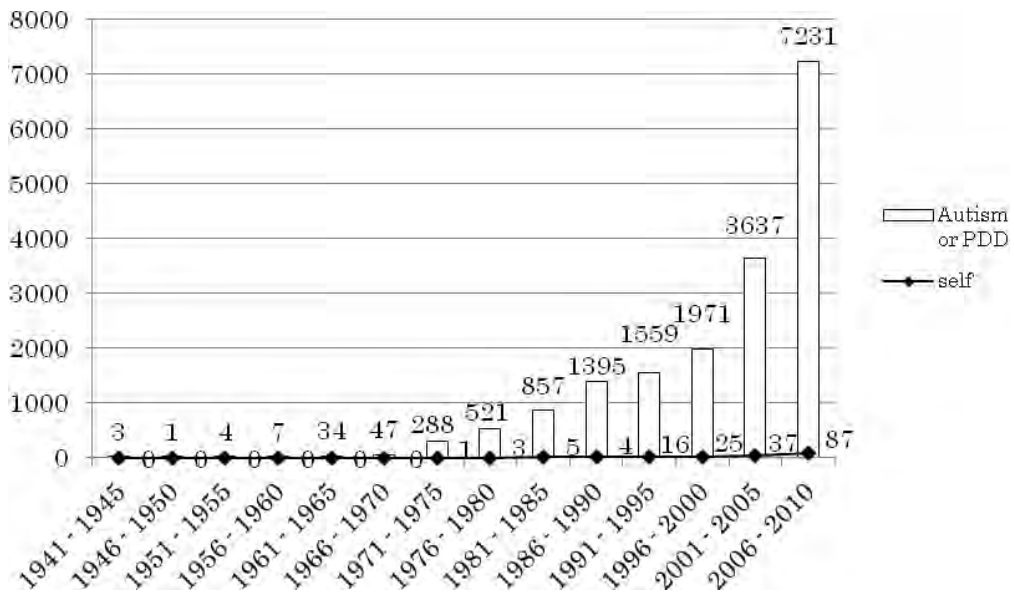


Figure 1 ASD 研究および ASD 者の自己に関する先行研究数の推移

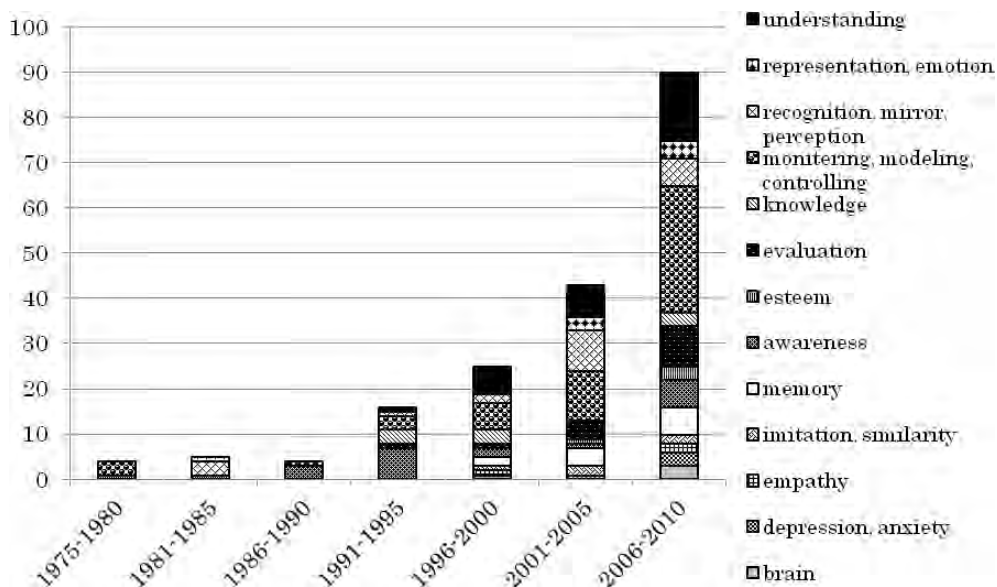


Figure 2 ASD 者の自己に関する先行研究の内容

3-2. 自己に関する先行研究の中での位置づけ

自己に関する研究において、自己は、主体的自己 (The self as subject: I) と客体的自己 (The self as object: me) という二重性を持つものであるということが James (1892) によって指摘されて以来、自己の二重性は一般的な見解として広く受け入れられてきた。そのような James (1892) の理論を発展させたひとりである Mead (1934) は、自己の社会性をより重視し、自己は他者との関係性の中で生じ発達していくものであると述べた。Mead (1934) によれば、客体的自己とは、他者の態度を自分自身の中に採用することによって生じ組織化される自己であり、主体的自己とは、他者の態度に対して生物学的に反応する自己である。そのため、動作を起こしている自己そのものである主体的自己は、次の瞬間に客体的自己として記憶の中に存在することになり、そのような行為の過程において初めて人は自己を知ることができるといえる。

このような Mead の提唱する客体的自己は、思考の対象 (Object of thought) としての自己であり、それ以前の発達段階に、知覚の対象 (Object of perception) としての自己が存在することを指摘したのが、Neisser (1995) である。Neisser (1995) は、乳幼児が知覚的に自己について知ることによって、周囲の他者や環境の情報を具体的に自己に取り入れて発展させ、思考としての自己を形成していくという、社会的相互作用の中での発達の視点から、自己についての知識 (self-knowledge) を以下の5つに整理した (Neisser, 1988; 1993)。

まず、直接知覚される自己として、生態学的自己 (the ecological self) と対人的自己 (the interpersonal self) が存在する。生態学的自己とは、「私が今ここでこの活動をしている」というような、物理的環境との関連において直接知覚される自己であり、乳幼児期の早期にあらわれる。対人的自己とは、生態学的自己と同様、乳幼児期早期にあらわれ、「私が今ここでこの対人的やりとり

をしている」というような、感情的な信頼関係やコミュニケーションにおける人類特有のやりとりの中で直接知覚されるものである。これら2つが基礎となって、拡張的自己(the extended self)、概念的自己(the conceptual self)、私的自己(the private self)が生起する。拡張的自己とは、「私がああの出来事を体験した者である」「私がいつもの決まった慣習を行う者である」などのような、個人的な記憶や予想に基づく自己である。後に Neisser (1993) は、この拡張的自己を想起的自己(the remembered self)と言い換えており、主に過去の記憶によって担われている自己であるともいえる。概念的自己は、社会的役割(夫、教員、アメリカ人など)、仮想的な内的存在(精神、無意識、脳など)、社会的な特徴(知的、魅力的、裕福など)のような、必ずしも真実ではなくとも自分自身について信じている多様な思想を含む、自己についての体系化された想定や理論である。私的自己とは、「私がこの痛みを感じられる唯一の者である」というような、自分自身の体験は直接的に他者と共有し得ないことへの気付きによって生起する自己である。

このような Neisser (1988; 1993; 1995) の提唱する5つの自己知識を、Mead (1934) による主体的自己と客体的自己のとらえかたと対照させると、生態学的自己と対人的自己の2つは主体的自己に、想起的自己、概念的自己、私的自己の3つは客体的自己に属することが指摘されている(榎本, 1998; 木下, 2005)。生態学的自己と対人的自己は、乳幼児期の早期に出現し、環境との相互作用の中で直接的に自分自身の行為や動作を知覚する臨場感のある自己であるのに対し、想起的自己、概念的自己、私的自己は、そのような直接的知覚を基に、記憶、予測、組織化、比較、内省など複雑で多層的な認知的過程を経て構成される自己であるためである。

客体的自己に属する3つに関して、後に Neisser (1995) は、概念的自己、想起的自己、私的自己という発達の順序を提示した。概念的自己は、自己を対象化すること、つまり自分自身や自分自身が置かれた状況に対して客観的な視点を持つことによってとらえることが可能となり、言語的に獲得された情報に基づく必要があることから、2歳過ぎ頃の発現が想定されている。想起的自己は、自己を対象化することが求められる点で、概念的自己を獲得した後に出現するとされ、体験した記憶を組織化して語る能力を必要とすることから、4歳頃の発現が想定されている。私的自己は、発達の指標が明確に定められていないものの、自分自身の体験に伴う意識や思想は自分自身だけのものであることを理解するという意味で、想起的自己の参照が必要であることが示唆されている。このように、それぞれの獲得時期および相互の関連性については、Neisser (1995) 自身も仄めかしているように、未だ曖昧な部分があり、十分に明らかにされていないことが指摘されよう。

上述のような枠組みから自己をとらえた場合、本研究で着目しようとする ASD 者の自己理解は、客体的自己に属し、その中でも、概念的自己および想起的自己に相当するものといえる。現在の自分自身を他者との関係性の中でどのように理解しているかということは、自己を対象化しとらえること、および、自己の体験を振り返り意味づけすることが必要と考えられるためである。つまり、時間的なパースペクティブを持って自己をみつめるということは、自己に一貫した言動や気質を見出し概念化してとらえることと切り離して考えることはできないのである。なお、客体的自己におけるもうひとつの自己知識である私的自己に関しては、他者と共有し得ない意識的経験を持つ自己

を意識するという点から、前述した「心の理論」との関連が指摘されている(木下, 2005)⁵。

よって、以下では、ASD 者の概念的自己および想起的自己に関する先行研究を取り上げ、その動向を明らかにする。過去を想起し意味づけることで自己の概念を形成していくと考えた場合、まずは過去からの時間軸に沿って ASD 者が自己に関する知識や体験をどのように記憶するのかという点を明らかにしたうえで、そのように記憶された知識や体験を基に、自己に対してどのような評価や理解を行っているのかという点について明らかにする必要がある。したがって、まず、ASD 者の想起的自己に関して、自己の知識や体験の記憶について検討した先行研究を取り上げ、次に、ASD 者の概念的自己に関して、自己に対する評価付けや理解について検討した先行研究を取り上げる。

3-3. 想起的自己—知識や体験の記憶

Tulving (1972)によれば、記憶は、自己に関する単語・言語的表象の意味・処理過程などの組織的な知識である意味的記憶(Semantic Memory)と、自己の体験や出来事について時間的・空間的に情報を保持するエピソード記憶(Episodic Memory)に二分される。

(1) 意味的記憶

意味的記憶とは、単語や言語的表象の意味・処理過程などの組織的な知識である(Tulving, 1972)。ASD 者における言語使用の特異性は、Kanner (1943)による初の自閉性障害事例の報告にも記述がみられて以来、今日でも ASD 診断基準項目のひとつとされている(APA, 2000)。ASD 者における意味的記憶について検討することは、彼らの言語使用の特異性という点から、彼らが他者との関係性の中で自己をどのようにとらえているかを明らかにすることにつながる。なぜならば、ASD 者の言語使用の特異性とは、人称代名詞の反転(例えば、会話の中で相手が自分のことを「あなた」と呼んだのに対して、それを一人称である「私」や「僕」に置き換えることなく、自分自身のことを「あなた」と表現する場合など)や、指示語の誤用(例えば、会話の中で相手が「こっち」と表現したことに対して、自分自身からみると「そっち」と表現するのが正しいにもかかわらず、そのまま「こっち」と表現する場合など)、言外の意味を含蓄した言い回しの不理解(例えば、電話口で「○○さんいますか?」と相手に聞かれて「います」とだけ答え、電話を取り継いでほしいという相手の意図を理解できない場合など)のように、他者との関係性に合わせて状況を判断し使用する場面においてみられるためである。このような ASD 者の特異的な言語使用は、比較的高い知能を有する者でもみられる場合があり、知的能力に依拠するものではない。前述のように、1960～70年代にかけては、ASD の基本障害は言語障害であるとされ、この時期の初期には、言語の記憶課題を通して ASD 者の意味的記憶の障害を唱える先行研究がみられた。しかし、以後より厳密に MA や言語能力を統制した対照群を設定して検討が行われるようになり、ASD 者の意味的記憶に障害がないことが徐々に明らかにされた。そのような背景の中で、ASD の原因論としての言語障害説が衰退したとも考えられよう。

ASD 者の意味的記憶が障害されていることを主張した研究として、Hermelin & O'Connor (1967)

や Frith (1969) があげられる。Hermelin & O'Connor (1967) は、自閉性障害者 12 名 (平均 CA10:8、平均 MA4:3) と VMA を適合させた知的障害者 12 名を対象に、文法的に統制されていないランダムな順番で 8 つの単語を提示した後 (例えば、「nine, this, one, tea, four, is, ten, cold」)、順不同でこれらの単語を再生させる課題などを用いた検討を行った。その結果、正しく記憶した単語の数という点では両群に差がみられなかった一方、単語どうしを意味的につなげてまとまりとして再生すること (例えば、「nine, one, four, ten」を数字としてひとまとまりに再生すること) は、自閉性障害者において有意に少なかったことを示し、自閉性障害者は単語を記憶する能力とその意味を整理し統合する能力が乖離しているという点で、意味的記憶に障害があることを指摘した。Frith (1969) は、16 名の自閉性障害者 (平均 CA11:6、平均 VMA4:9) と 16 名の定型発達者を対象として、意味と音韻による単語の記憶成績を比較し、自閉性障害者は音韻による記憶に障害がない一方、単語を意味のある文脈の構造を利用して記憶することに困難を示すことを明らかにした。

これらの先行研究の結果は、上記のような ASD 者が示す言語使用の特徴に対して、人称代名詞や指示語、言い回しなどに限らず、彼らが単語や言葉そのものの意味の理解に基づいた記憶をしていないという説明を与える。つまり、他者との関係性の中で自己をとらえることに脆弱さがあるために言語の誤用を示すのではなく、言語そのものの意味を理解しその意味別に単語や言葉をカテゴリーライズして記憶するという処理過程に障害があるため言語の誤用がみられるということになる。

ところが、1970 年代に入ると、そのような論証を覆す実証的な検証が多数行われ、ASD 者の意味的記憶の障害は否定されるようになる。例えば、Fyffe & Prior (1978) は、自閉性障害者 (平均 CA11:3、平均 MA6:8、平均 VIQ58) と知的障害者および定型発達者を対象として実験を実施し、全ての対象者群がランダムな語句よりも意味的に統制された語句のほうをより記憶しやすいことを実証した。Ramondo & Milech (1984) もまた、自閉性障害者 (平均 CA13:6、IQ55～127)、知的障害者、定型発達者を対象とした文章の学習・想起課題を実施する中で、意味的な統制の度合いが高い語句のほうをより記憶されやすい点で対象者群の間に差がないことを明らかにした。その一方で、自閉性障害児における記憶の成績が定型発達者よりも劣っていた結果については、自閉性障害児が情報を意味的に操作することが困難である可能性はあるものの、それが自閉性障害ならではの特徴であると断言はできないと指摘した。他にも、様々な課題を用いて自閉性障害者の意味的記憶に関する調査が行われ (Tager-Flusberg, 1985; Boucher, 1988; 十一・神尾, 1998a; 1998b)、いずれの研究でも、自閉性障害者における意味的記憶には基本的な障害がないことが明らかにされている。

これらの結果により、ASD 者の意味的記憶が障害されていないことが実証的に示されたといえるが、ではなぜ、冒頭で述べたような言語使用の特異性があるのか。このことに関しては、自閉性障害に特有の、他者との関係のとりにくさが、特異的な言語使用の背景にあることを示唆する研究がある。Lee, Hobson, & Chiat (1994) は、自閉性障害者 (CA8:4～23:1、VMA3:5～8:2) と知的障害者を対象に、「I」「You」「me」の理解と使用を検討した。その結果、実験状況では対象者全員がこれらの代名詞を正しく理解・使用した一方で、自閉性障害者は、代名詞の代わりに固有名詞を多く使用したこと、実験者を「You」と称することが少ないこと、日常生活では代名詞の反転がみら

れたことなどを明らかにした。この結果から、ASD 者は、言語の意味を正しく理解・使用する能力があっても、場面や文脈の状況に合わせて自分の立場や他者との関係性をふまえて柔軟に対応させることに難しさを示すことがうかがわれる。このような対人的な状況に依存した言語使用の難しさは、ASD 者における自己意識が低下しているためであると、十一・神尾 (2001) は指摘する。自閉性障害者 (平均 CA18.7、平均 VIQ81.1)、知的障害者、定型発達者を対象に、人物を形容する単語に対して、音韻・意味・自己準拠性それぞれによる記憶の成績を比較した結果、定型発達者および知的障害者は、「自分自身に当てはまるかどうか」という教示を伴って単語を提示した場合、記憶の成績が向上した (自己準拠性効果がみられた) のに対し、自閉性障害者では自己準拠性効果がみられなかった。このことから、十一・神尾 (2001) は、自閉性障害者は自己に関する情報をそれ以外の意味情報と区別せず記憶するという特異な認知処理を行っていることを指摘した。人称代名詞や指示語の使用は、通常、自他のパースペクティブをとらえたいうえで、主客の方向性を回転させるなどの調整を行う必要がある。自閉性障害者は、自分が他者と相対しているという意識、あるいは他者を通して自己を眺めるという視点が欠如していることから、前提となるパースペクティブの認識に弱さを示し、そのような意味で自己意識が低下しているということになる (十一・神尾, 2001)

以上のことから、ASD 者が示す言語使用の特異性は、意味的記憶に関する障害に依拠するものではない、つまり、単語や言葉そのものの意味を理解することが困難であるためではなく、むしろ、その単語や言葉の意味が、他者の視点や立場に合わせて変容することをとらえることの難しさによるものであると考えられる。換言すれば、ASD 者における、自己と他者の関係性を瞬時にとらえて表現する柔軟性の弱さが反映されているということができただろう。

(2) エピソード記憶

エピソード記憶とは、自己の体験や出来事について時間的・空間的に情報を保持することを意味する (Tulving, 1972)。意味的記憶が、非人称的な事実としての情報や一般的知識などの記憶であるのに対して、エピソード記憶は、主体的、個人的な体験の記憶であり、体験したときの心的状態の記憶を含む (Wheeler, Stuss, & Tulving, 1997)。

ASD 者のエピソード記憶に関する先行研究は、他者との関係性の中での自己という観点から2つに分けられる。出来事や体験の主体が自己か他者かという点が ASD 者のエピソード記憶に及ぼす影響の検討と、ASD 者のエピソード記憶の内容そのものに関する検討である。前者は、出来事や体験を記憶する際の特徴であり、後者は、記憶を表出する際の特徴であるといえるだろう。

① **出来事や体験を記憶する際の特徴**：出来事や体験の主体が自己か他者かということは、その出来事や体験がどのようにして起こったのかを認識するという意味で、ソース・モニタリング (Source Monitoring) 能力とも関連する。我々は通常、行為の主体が他者である出来事よりも、主体が自分自身であるほうが、よりその出来事が記憶に残りやすい。しかしながら、ASD 者においては、行為の主体が自分自身であることが記憶の促進に反映されにくい側面があることが指摘されている。

例えば、Russel & Jarrold (1999) は、自閉性障害者 (平均生活月齢158.7カ月、平均言語性精神月

齢85.6カ月)、知的障害者、定型発達者を対象として、絵カードを用いたゲームの中で、それぞれのカードの所有者が自分か他者かを記憶する課題を実施した。その結果、知的障害者および定型発達者は、絵カードを置いた主体が自分自身である場合、そのことをよく覚えていたのに対し、自閉性障害者ではそのような効果がみられないことを示した。Millward, Powell, Messer, & Jordan (2000) もまた、自閉性障害者(平均 CA13.1、平均 MA6.3)と知的障害者に対し、散歩の途中、特徴のある場所(例:公園やショッピングエリア)で、実験者がある出来事を指摘しコメントする(例:「すべり台に乗りたい?」)という過程を経た後、「自分自身がしたこと」「他者(ペアの相手)がしたこと」それぞれについての質問を行った。その結果、自閉性障害者は知的障害者よりも、自分自身の体験について報告した回数が有意に少なく、他者が行ったことに関する報告の数には差がないことを示した。これらのことから、ASD 者は、他者が行った行為や出来事と比較して、自分自身で行った行為や体験した出来事をより記憶しやすいとはいえないことになる。

これに対し、Lind & Bolwer (2009) は、ASD 者においても、他者よりも自分が行ったことをよりよく記憶するという点では定型発達者と差がないことを示した。ASD 者(平均 CA9.26、平均 VMA6.66)と定型発達者を対象に、絵カードをひいて命名するゲームの中で、誰がどのカードに何と命名したかを記憶する課題を実施した結果、両群とも自分自身が命名したカードをよく記憶していたことを明らかにした。この実験は、カードを置くという単純な行為(Russel & Jarrold, 1999)や、散歩中に起きた出来事の自由想起(Millward et al., 2000)と比較すると、カードの内容について自分自身で考え命名することで自分の意図や感覚を体験や出来事と関連付けるという手続きを経ている。このことにより、ASD 者が自分自身で命名したカードの記憶が促進された可能性があるだろう。

自己の意図や感覚と記憶との関連について、Bowler, Gardiner, & Grice (2000) は、ASD 者が単語を記憶する際、どの程度自己と関連付けて行うのかに着目した。アスペルガー障害者(平均 CA30.9、平均 IQ92.6)と定型発達者を対象に、単語が一度提示されたものか初出のものかを問うことによる記憶課題を実施し、対象者が覚えていた単語について、どのようにして記憶していたのか理由を尋ねた。その理由が、非知識的な意識を伴う記憶の場合には「remember」(例えば、「草」という単語を覚えていた理由として「この単語を見たとき、庭の草むしりをしなければならないことを思い出したから」)、知識的な意識による記憶の場合には「know」(例えば、「リストにあったことを知っているからその単語を覚えている」)として分類した。その結果、単語の記憶数には両群で差がない一方、記憶の理由では、アスペルガー障害者は定型発達者よりも「remember」が少なく「know」が多いことを明らかにした。つまり、アスペルガー障害者は、単語を記憶する際に、自分自身の体験を自発的に想起し関連付けて覚えることが、定型発達者に比べて少ないといえる。このことは、十一・神尾(2001)が指摘した自己準拠性の低さとも共通するであろう。

以上をまとめると、ASD 者は、行為の主体が自分自身であることが記憶の促進に反映されにくく(Russel & Jarrold, 1999; Millward et al., 2000)、単語の記憶を自己の体験と結びつけないこと(Bowler et al., 2000)から、自己意識の希薄さがうかがわれる。一方で、例えばカードの内容に対して自分自身で考えた名前をつけること(Lind & Bolwer, 2009)のような、自己の意図や感覚を体験

や出来事に関連付ける手続きを経ることが、ASD 者のエピソード記憶における主体としての自己に対する意識を促進するといえよう。

② **出来事や体験を表出する際の特徴**：上述のような特徴のある過程を経て行われた ASD 者のエピソード記憶について、以下では、記憶の内容そのものについて検討した研究を取り上げ、ASD 者が出来事や体験などの記憶を表出する際に示す特徴について明らかにする。

まず、ASD 者のエピソード記憶における内容の正確性や被暗示性に着目した研究として、Bruck, London, Landa, & Goodman (2007) があげられる。ASD 者 (CA5 ~ 10, FIQ70 以上) と定型発達者を対象にした調査において、対象者とその保護者からの過去の出来事 (2 歳時、2 年前など) の聴取、ならびに、対象児にマジックショーを体験させた後に与えた誤情報が、12 日後の記憶に影響を及ぼしているか否かを検討した。その結果、ASD 者は過去の出来事に関する叙述が少ないこと、事実に関する脱落が多い一方で、事実の置き換えは多くないこと、暗示性は高くはないことなどを示した。

なぜ ASD 者はエピソード記憶を想起しにくいのかについては、Boucher (1981) が、ASD に特有の言語的な特異性と関連付けた指摘を行っている。Boucher (1981) は、自閉性障害者 (平均 CA13.2、平均 VMA7.2)、知的障害者、定型発達者を対象に、複数の活動 (紙サッカー、ボックスカメラで遊ぶなど) を行い、数分後にそれらを想起させる実験を行った。その結果、想起された活動の数は、自閉性障害者群、知的障害者群、定型発達者群の順で有意に少ないこと、および、自閉性障害者群においてのみ、言語能力の高さと活動の想起数が有意に関連することを明らかにした。Boucher (1981) は、これらの結果について、自閉性障害者にみられる特異的な言語の使用により、彼らの発言が適切に活動を想起したものとしては扱われなかった可能性や、実際の活動中に自閉性障害者の発言が少なく、活動に対して言語による意味が与えられなかった可能性を指摘した。

Boucher & Lewis (1989) もまた、知的障害のない自閉性障害者 (平均 CA12:11) を対象として、12 ~ 14 カ月前に体験した 8 つの活動 (例えば、「物語を読む」、「絵を描く」、「クリスマスに欲しいプレゼントの候補をあげる」など) に関する記憶の調査を実施し、自閉性障害者が、オープン・クエスションに対する自由想起は困難であるものの、クローズドクエスションでヒントが与えられるような質問に対しては想起が促されることを明らかにした。Boucher & Lewis (1989) はこのことから、自閉性障害者におけるエピソード記憶は、記憶の想起そのものが困難あるいは少ないというよりは、言語という手段により制限されていると指摘した。

このことは、Hurlbert, Happé, & Frith (1994) の指摘する、ASD 者の記憶における視覚的イメージの多さと関連すると考えられる。Hurlbert et al. (1994) は、叙述的体験サンプリング法 (descriptive experience sampling method) という独自の手法を用いて、3 事例のアスペルガー障害者 (CA24 ~ 34) を対象に、彼らが自己の心的状態を語ること、つまり内省が可能であるかどうかを検討した。その結果、ASD 者は内省報告することが可能であることを示すと同時に、その報告には視覚的イメージが多く含まれること、他者がどのように報告したかを全く気にしないことなどの点で特徴的であることを明らかにした。

ASD 者の想起には視覚的なイメージが多く含まれ、言語という手段によりその表出が制限されているということは、ASD 者の臨床像として示される、パニックやフラッシュバックの多さと共通するのではないだろうか。なぜならば、パニックやフラッシュバックは、言語的な意味を媒介とした再想起が不可能であるために、現在の知覚と類似した過去の知覚が端的に再生され、過去の映像が回帰するといわれている(村上, 2008)ためである。杉山(1994)は、このような記憶想起を time slip 現象と称し、その出現の仕方は、独語や独笑、怒りや泣き叫ぶことなど様々であること、この現象が ASD 者に特有であることなどを指摘している。

以上のような先行研究をまとめると、ASD 者のエピソード記憶の内容そのものの歪みや被暗示性は大きくないものの、記憶を想起することが少ないという特徴を示す(Bruck et al., 2007)。その理由として、エピソード記憶の想起そのものが困難なのではなく、彼らが想起するエピソード記憶の内容には視覚的イメージが多く含まれており(Hurlbert et al., 1994)、言語という表現手段により制限されている(Boucher, 1981; Boucher & Lewis, 1989)ためと考えられる。

このような、ASD 者におけるエピソード記憶、つまり、体験や出来事を想起することに関する特徴を、彼らの自己の形成という視点から考慮した場合、どのようなことがいえるのか。過去を想起することは、想起された出来事や体験に対する意味づけを伴うことで、自己を概念化することと関連深い。例えば、過去のある体験について振り返り、失敗であると意味づけることで、現在の自分自身に対し無能感を抱くことや、逆に、現在の自分自身に対して無能感を抱いていることにより、過去の体験や出来事を否定的にとらえるということもあり得る。このことから、想起的自己と概念的自己は、体験や出来事に対する意味づけによってつながり、相互に影響し合っていると考えることができるだろう。このように考えた場合、ASD 者における、言語を介したエピソード記憶の想起の少なさは、彼らの自己を理解することに関する弱さともとらえられる。つまり、ASD 者においては、想起的自己と概念的自己のつながりの脆弱性が指摘される。

3-4. 概念的自己—自己に対する評価や認識

ASD 者の概念的自己に関する研究は、自己に対する価値付けや自尊心などの評価的側面を検討したものと、自己に対する理解という認識的側面を検討したものとに分けられる。前者は、尺度を用いた定量的な測定法を用いて検討され、後者は、言語表現の質的な検討によって明らかにされる。

(1) 自己評価・自尊心

数値化された評定尺度を用いて定量的に測定される、自分自身に対する評価付けや自尊心の程度の検討には、例えば、Harter (1985) の Self-Perception Profile for Children (以下、SPPC) を使用して ASD 者の自己評価を検討した一連の先行研究がある。SPPC とは、「学業」「社会性」「運動」「容姿」「振舞い」の5領域における自己評価と、自尊心を表す「全体的自己感」領域で構成される尺度であり、各領域に設定された複数の項目(例えば、社会性領域では「自分はすぐ友達をつくることができる」「自分は友達がたくさんいる」など)を、対象者がそれぞれ4段階(「とてもあてはまる」～「全然あてはまらない」)で評定するものである。

例えば、Capps et al. (1995) は、高機能自閉性障害者 (CA9:3～16:10) を対象に、SPPC を実施し、ASD 者が定型発達者よりも全体的に自己の能力を低く評価していること、知能指数が高い者ほど自己の社会性を低く評価していることなどを明らかにした。また、「悲しみ」「幸せ」「恥」「誇り」などの感情をどのようなときに感じるかの調査、および、保護者に対する質問紙調査などを同時に実施し、自己の社会的能力を低く評価している ASD 者ほど、自己の感情をとらえる能力が高く、保護者からはより社会に適応していると思われること、自尊心の低い ASD 者のほうが、自尊心の高い ASD 者よりも、悲しみや恐怖を表現することが少なく、より好奇心が旺盛であると保護者から評価されていることなどを指摘した。SPPC を用いた検討により ASD 者が自己の社会性を低く評価するという結果は、他の先行研究 (Bauminger et al., 2004; 岡, 2006) でも示されており、岡 (2006) はその背景に ASD 者の多くがいじめを経験していることを指摘している。

ASD 者の自己評価と自尊心との関連について、山内・納富・木谷・吉田 (2003) は、社会性の自己評価と自尊心との関連の特異性を指摘した。小学校4～6年生の ASD 者を対象に SPPC を実施した結果、ASD 者は定型発達者よりも自尊心が高く、定型発達者は自尊心の高さが自己の社会性や振舞いの能力評価の高さと関連するのに対して、ASD 者はそのような関連がないことを示し、ASD 者は各領域での自己評価の低さを統合させ自尊心に反映させないことを示唆した。

ASD 者における自己評価や自尊心が、彼ら自身がとらえる友情の質とどのように関連するのかについて検討した研究 (Bauminger et al., 2004) では、高機能自閉性障害者 (CA8:3～17:2) を対象に、SPPC の他、友情の質に関する尺度 (The Perception of Friendship Qualities) などが実施された。その結果、ASD 者は自己の社会性と運動の能力を低く評価していることや、定型発達者は自己の社会性の評価の高さが友情の質としての「援助 (help)」(例えば、「私の親友は私が必要ときに助けてくれる」) の高さに関連していたのに対して、ASD 者は、自尊心の高さが、友情の質としての「共行動 (companionship)」(例えば、「親友と私は自由時間ずっと一緒に過ごす」)、「親密性 (security)」(例えば、「何か困ったことがあったとき、他の人には言えなくても親友だけには言える」)、「近接性 (closeness)」(例えば、「親友とは近くの席に座る」) の高さに関連することを示した。その関連の仕方は特異的であるものの、ASD 者にとって、友情の質は自尊心を維持するための重要な役割を果たしている可能性が示されたといえよう。

以上、SPPC を用いた一連の先行研究で得られた知見をまとめると、ASD 者は、自己の社会性を低く評価することがうかがわれる (Capps et al., 1995; 岡, 2006; Bauminger et al., 2004)。定型発達者の場合、社会性の低さは自尊心の低さにつながるのに対して、ASD 者の場合、社会性の低さは必ずしも自尊心の低さとは関連しない (Capps et al., 1995; 山内ら, 2003)。ASD 者の自尊心の高さは、例えば、「親友とともに行動している」「親友にだけは話せる」「親友が近くにいる」などのような友情の質を ASD 者が認識していること (Bauminger et al., 2004) や、保護者によって ASD 者が自分自身の悲しみや恐怖をよく表現すると認識されていること (Capps et al., 1995) などと関連する。また、ASD 者の社会性における自己評価に関しては、低く評価している者ほど知的能力が高いことや、保護者からはより社会に適応しているとみなされていること (Bauminger et al., 2004)、

いじめの体験が社会性の自己評価の低さにつながること(岡, 2006)などが示唆された。

このような結果より、ASD 者の自己評価の特異性がうかがわれる一方、ASD 者がそもそも定型発達者と同様の価値判断や評価基準を用いたうえで自己を評価していたのかどうかという点に疑問が残る。例えば、ASD 者が「友達がたくさんいる」という SPPC の社会性項目において、「あまり当てはまらない」を選び評定したとしても、「たくさん友達がいる」ことが ASD 者にとって重要であるのかどうかは不明であるため、それが自己を低く評価していることには直結しないだろう。研究者が定めた尺度において、ある人の理想と現実とのズレが大きくても、その人にとって理想とは無関係のあまり意味を持たない領域であれば、それは自己に反映されない(遠藤, 1991)。ASD 者において、自己評価が自尊心に反映されないという結果は、このような価値判断や評価基準そのものが定型発達者と異なっていることを示唆する。SPPC には、回答が選択式であることから結果の明確性や実施の簡易性が高いという利点がある一方、このように、設定された項目の特性が個人にとってどれ程重要かが反映されないという欠点があるといえよう。よって、ASD 者の価値判断や評価基準を明確にしたうえで、彼らの自己評価や自尊心を検討する必要がある。

項目を評価する本人の基準を重視し構成された尺度に、山本・田上(2003)による自己概念尺度がある。小学5年生～高校3年生の定型発達者を対象に、「私のよいところは～です」というポジティブな自己の側面、「私の気に入らないところは～です」というネガティブな自己の側面を調査し、各側面において得られた項目を、それぞれ小中学生用・高校生用尺度として設定した尺度であり、各項目について、当てはまる程度を5段階で評価する現実自己と、そうなりたい程度を5段階で評価する理想自己に関する評定を行う。この自己概念尺度を、アスペルガー障害の中学生に対して適用したのが、金井・上村(2007)である。しかしながら、金井・上村(2007)は、各項目がどの程度実際の自分自身に当てはまるかという現実自己のみの評定を実施しており、理想自己とのずれを検討していない。結果として、アスペルガー障害者は定型発達者よりも有意に低いネガティブ得点を示し、アスペルガー障害者が現実の自分自身について、消極性の高さや自己中心性の高さ、劣等感の強さなどを感じていることを示した。金井・上村(2007)は、この背景にアスペルガー障害者の失敗体験や被侵害行為の経験の多さを指摘しているが、彼ら自身がどのような価値判断および評価基準に基づき現実自己を評定したのかについては不明である。つまり、アスペルガー障害者が、自己の消極性の高さや自己中心性の高さ、劣等感の強さを「あてはまる」と評定したからといって、必ずしもそのような自分に「なりたくない」と考えていたとはいえないことになる。

金井・上村(2007)による自己概念尺度は、本来、理想自己と現実自己のズレを検討することが可能であるが、尺度の作成にあたっては、定型発達者がそれぞれポジティブ・ネガティブにとらえる自己の側面をもとに項目が設定されている。そのため、ASD 者がとらえる自己のポジティブ・ネガティブな側面とは異なる可能性もある。ASD 者自身の価値判断や評価基準そのものを明確にするには、予め研究者が用意した項目に対する彼らの評価を定量的に測定するのではなく、ASD 者自身による着眼点を明らかにしたうえで、その内容を質的に分析することが必要であるだろう。

(2) 自己理解

ASD 者による言語での自己表現を質的に分析・分類することによって、その特徴を明らかにしようとする研究には、Damon & Hart (1988)による自己理解発達モデル (The developmental model of self-understanding) を基にした一連の先行研究がある。

Damon & Hart (1988)のモデルは、自己についての質問(例えば、「自分はどんな人だと思う?」「自分の長所/短所は?」など)をインタビューで行い、対象者の回答をモデルに沿って分類するものである。対象者の自発的な表現が優先され、かつ言葉の意味を明確にするための詳細なやりとりが可能となる。また、分類基準は、対人関係の側面を含むカテゴリーやレベルが発達の視点から体系立てられ、設置されている。このモデル内では、自己理解の発達が、それぞれのカテゴリーにおいてレベルが移動する形で示される点が特徴的であるといえる。

この Damon & Hart (1988) 自己理解発達モデルを、自閉性障害者 (CA9:2～19:0、VMA4:4～9:9) を対象に実施したのが、Lee & Hobson (1998) である。彼らは、知的障害者との比較を通して、自閉性障害者が他者との相互交渉のあり方から自己を理解する「社会的自己」カテゴリーの言及(例えば「他者を手伝う」「社会的な集団に所属する」など、他者との社会的関係において自己をとらえる言及)、および「比較による自己査定」レベルにおける言及(例えば、「自分は友達とうまく付き合っていることを誇りに思う」など、他者との関係ややりとりをふまえた言及)が少ないことを示し、彼らの集団体験の乏しさによるものであると考察した。

Lee & Hobson (1998) は言語発達に遅れのある自閉性障害者を対象としたのに対して、Farmer, Robertson, Kenny, & Siitarinen (2007) は、言語発達に遅れないアスペルガー障害者 (CA13:2～15:9) を対象に Damon & Hart (1988) のモデルを適用した。その結果、アスペルガー障害者の自己理解言及には、「心理的自己」カテゴリーに分類される回答(例えば「怒りっぽい」「～が欲しい」など、自己の心理的な状態についての言及)が多いことを示し、彼らが自己の感情の起伏、興味、好き嫌いなどに多く言及することの背景にある不安やストレスの高さを示唆した。さらに、「比較による自己査定」および「対人的意味付け」レベルの自己理解言及数は、定型発達者に比べてアスペルガー障害者において有意に少ないという点で、Lee & Hobson (1998) の結果の一部を支持し、アスペルガー障害者における対人的な自己の側面が未発達であると考察した。

この Damon & Hart (1988) 自己理解発達モデルの客体的自己部分に関して、カテゴリー定義の曖昧さや発達レベルの矛盾などの問題点を指摘し、改訂を行って作成されたのが、佐久間・遠藤・無藤(2000)による自己描出内容分類カテゴリーである。野村・別府(2005)は、この佐久間ら(2000)による自己描出内容分類カテゴリーを用いて、小中学生の高機能自閉性障害者を対象とした調査を実施した。その結果、例えば「人前で発表すると緊張する」などの自己の外向的な行動や、「元気」「明るい」など自己の外向性に関する人格特性への言及数が、全体的言及の中で特に少ないという点で、Lee & Hobson (1998) および Farmer et al. (2007) と共通する見解を示した。一方、発達の視点からの検討により、このような自己の対人的な側面に関する言及は、小学校低学年よりも中学生において多くみられたことを示し、年齢の向上に伴って発達することを指摘した。

同様に、この佐久間ら(2000)による自己描出内容分類カテゴリーを用いて、ASD者(平均CA12:7、平均MA11:3)を対象に調査を行った森田(2005)は、ASD者が自己の人格特性に関する理解が少なく、概念化や抽象化に弱さがあることを指摘した。また、ASD者は自分の好きなどころには言及せず嫌いなどころだけを述べる、よいところには言及せず悪いところのみ述べるなど、自己の否定的な側面を表出することが多くみられ、通常学級に在籍するASD者が周囲から否定的なフィードバックを受けたり失敗体験を重ねていることを背景として考察した。

以上の先行研究より、ASD者の自己理解の特徴については、対人的・社会的な側面から自己について言及することが少ないことがうかがわれる(Lee & Hobson, 1998; 森田, 2005; 野村・別府, 2005; Farmer et al., 2007)。そのような中で、自己の感情の起伏、興味、好き嫌いなどを多く表現する傾向にあること(Farmer et al., 2007)、年齢の発達に伴い対人的・社会的な自己への言及が増加すること(野村・別府, 2005)、肯定的な自己理解よりも否定的な自己理解が多いこと(森田, 2005)などが明らかにされてきたといえる。

Damon & Hart (1988)による自己理解発達モデルや、佐久間ら(2000)による自己描出内容分類カテゴリーを用いて、ASD者の自己理解を検討することは、彼ら自身から自発的に表現された内容を尊重することを可能とする。この点は、前述の定量的測定の問題点として指摘された、ASD者自身の価値観や重要視している側面をとらえることを可能とする。また、対面による個別のインタビューという手法は、ASD者に特有の言語に関する理解や使用の特徴に対処することが可能となる。前述のように、知的障害や言語的障害がないASD者であっても、その言語表現が独特であることや、言葉の意味を字義通り解釈することなど、言語面での特異性が示されることが多々あるため、実際にASD者と言葉を交わす中で、彼らが使用する言葉の意味や、質問者側の発言の意図を丁寧に確認し明確にできるこの手法の有効性は高いだろう。

一方、これらのモデルやカテゴリーを用いることの問題点として、設定された分類基準がASDの障害特性を十分に反映していないことが指摘される。いずれも定型発達者の自己理解をとらえるために開発されたモデルおよびカテゴリーを基にしており、定型発達者の基準をASD者に当てはめているといえるだろう。したがって、ASD者に特有の自己理解が表現された場合であっても、それらはその他の表現と一緒に規定の分類基準の中に埋もれ、その独自性が明示されない可能性がある。よって、ASD者の自己理解に関する言語表現を分類することを通して彼らの自己理解の特徴をとらえるにあたっては、分類のための枠そのものにASD者の障害特性を反映したうえで、彼らの表現を分析する必要があるといえるだろう。

4. おわりに

以上より、ASD者の自己については、意味記憶に障害がないもののエピソード記憶に特異性があり、想起的自己と概念的自己とのつながりの脆弱性があるといえよう。そのような脆弱性は、自己を概念化してとらえようとするとき、その概念化のために適当な出来事や体験を想起し、意味づけることが難しいことを示していると思われる。よって、このような脆弱性に対する支援が今日急

務の課題であり、まずは ASD 者の価値基準に基づいた自己理解の内容を質的に検討していくことが重要である。ASD 者の自己理解のあり方をふまえたうえで、彼ら・彼女らが過去の体験や出来事を振り返り、そこに意味づけするための心的作業を援助し、促進していくことが必要であるだろう。

【引用文献】

- American Psychiatric Association 1980 Quick reference to the diagnostic criteria from DSM-III. Washington D. C. 高橋三郎・花田耕一・藤縄 昭訳 1982 DSM-III 精神障害の分類と診断の手引 医学書院
- American Psychiatric Association 1987 Quick reference to the diagnostic criteria from DSM-III-R. Washington D. C. 高橋三郎・花田耕一・藤縄 昭訳 1988 DSM-III-R 精神障害の分類と診断の手引 第2版 医学書院
- American Psychiatric Association 2000 Quick reference to the diagnostic criteria from DSM-IV-TR. Washington D. C. 高橋三郎・大野裕・染谷俊幸訳 2003 DSM-IV-TR 精神疾患の分類と診断の手引 新訂版 医学書院
- Asperger, H. 1944 Die "autistischen psychopathen" im kindesalter. Archiv für psychiatrie und nervenkrankheiten, 117, 76-137. 詫摩武元訳 1993 小児の自閉的精神病質 児童青年精神医学とその近接領域, 34(2), 180-197; 34(3), 282-301.
- Bartak, L., Rutter, M., & Cox, A. 1977 A comparative study of infantile autism and specific developmental receptive language disorders. III. Discriminant function analysis. Journal of autism and childhood schizophrenia, 7(4), 383-396.
- Baron-Cohen, S., Leslie, A. M., & Frith, U. 1985 Does the autistic child have a 'theory of mind'? Cognition, 21, 37-46.
- Bauminger, N., Shulman, C., & Agam, G. 2004 The link between perception of self and of social relationship in high-functioning children with autism. Journal of Developmental and Physical Disabilities, 16(2), 193-214.
- 別府 哲 1996 自閉症児におけるジョイントアテンション行動としての指さし理解の発達：健常乳幼児との比較を通して 発達心理学研究, 7(2), 128-137.
- 別府 哲 2007 高機能自閉症児の自己の発達と教育・支援 田中道治・都築 学・別府 哲・小島道生編 発達障害のある子どもの自己を育てる—内面世界の成長を支える教育・支援— ナカニシヤ出版, 68-81.
- Boucher, J. 1981 Memory for recent events in autistic children. Journal of autism and developmental disorders, 11(3), 293-301.
- Boucher, J. 1988 Word fluency in high-functioning autistic children. Journal of autism and developmental disorders, 18(4), 637-645.
- Boucher, J. & Lewis, V. 1989 Memory impairments and communication in relatively able autistic children. Journal of child psychology and psychiatry, 30(1), 99-122.
- Bowler, D. M. 1992 'Theory of Mind'in Asperger's syndrome. Journal of child psychology and psychiatry, 33, 877-893.
- Bowler, D.M., Gardiner, J.M., & Grice, S.J. 2000 Episodic memory and remembering in adults with Asperger syndrome. Journal of autism and developmental disorders, 30(4), 295-304.
- Bruck, M., London, K., Landa, R., & Goodman, J. 2007 Autobiographical memory and suggestibility in children with autism spectrum disorder. Development and psychopathology, 19(1), 73-95.

- Cantwell, P., D., Baker, L., Rutter, M., & Mawhood, L. 1989 Infantile autism and developmental receptive dysphasia: A comparative follow-up into middle childhood. *Journal of autism and developmental disorder*, 19(1), 19-31.
- Capps, L., Sigman, M., & Yirmiya, N. 1995 Self-competence and emotional understanding in high-functioning children with autism. *Development and psychopathology*, 7(1), 137-149.
- Damon, W. & Hart, D. 1988 *Self-understanding in childhood and adolescence*. Cambridge University Press.
- 遠藤由実 1991 理想自己に関する最近の研究動向 上越教育大学研究紀要, 10(2), 19-35.
- 榎本博明 1998 「自己」の心理学—自分探しへの誘い— サイエンス社
- Farmer, M., Robertson, B., Kenny, C., & Siitarinen, J. 2007 Language and the development of self-understanding in children with communication difficulties. *Educational and child psychology*, 24(4), 116-129.
- Frith, U. 1969 Emphasis and meaning in recall in normal and autistic children. *Language and Speech*, 12(1), 29-38.
- Fyffe, C. & Prior, M. 1978 Evidence for language recoding in autistic, retarded and normal children: a re-examination. *British journal of psychology*, 69, 393-402.
- Goossens L. & Phinney, S. J. 1996 Identity, context, and development. *Journal of adolescents*, 19, 491-496.
- Grandin, T. & Scariano, M. M. 1986 *Emergence labeled autistic*. Grand Central Publishing. カニングハム久子訳
1994 我, 自閉症に生まれて 学習研究社
- Happé, F. G. E. 1994 An advanced test of theory of mind: Understanding of story characters' thoughts and feelings by able autistic, mentally handicapped, and normal children and adults. *Journal of autism and developmental disorders*, 24, 129-154.
- Harter, S. 1985 *Self-Perception Profile for Children*. University of Denver.
- Hermelin, B. & O'Connor, N. 1967 Remembering of words by psychotic and subnormal children. *The British journal of psychology*, 58 (3), 213-218
- Hobson, R., P. 1993 *Autism and the development of mind*. Erlbam. 木下孝司監訳 2000 自閉症と心の発達 学苑社
- Hurlbert, T. R., Happé, F., & Frith, U. 1994 Sampling the form of inner experience in three adults with Asperger syndrome. *Psychological medicine*, 24, 385-395.
- Iacoboni, M. 2008 *Mirroring people: the new science of how we can connect with others*. Farrar Straus & Giroux. 塩原通緒(訳) 2009 ミラーニューロンの発見 「物まね細胞」が明かす驚きの脳科学 早川書房
- James, W. 1892 *Psychology, briefer course*. Dover Publications. 今田 寛訳 1992 心理学(上) 岩波書店
- 金井美保子・上村恵津子 2007 中学生の自己概念・適応感・精神的健康に関する臨床心理学的研究: アスペルガー障害の生徒と健常生徒を比較して 信州心理臨床紀要, 6, 5-14.
- Kanner, L. 1943 Autistic disturbances of affective contact. *Nervous Child*, 2, 217-250.
- Kanner, L., Rodriguez, A., & Ashenden, B. 1972 How far can autistic children go in matters of social adaptation? *Journal of autism and childhood schizophrenia*, 2(1), 9-33.
- 木下孝司 1995 他者の心, 自分の心: 心の理解の始まり 麻生武・内田伸子 (編) 講座: 生涯発達心理学 第2巻 人生への旅立ち 第6章, 163-192. 金子書房.
- 木下孝司 2005 幼児期における時間的拡張自己と「心の理論」—時間的視点からの理論的考察— 心理科学, 25(1), 58-73.

- Kolvin, L. 1971 Studies in the childhood psychoses: Diagnostic criteria and classification. *The british journal of psychiatry*, 118, 381-384.
- Lee, A., & Hobson, R. P. 1998 On developing self-concepts: A controlled study of children and adolescents with autism. *Journal of child psychology and psychiatry*, 39(8), 1131-1144.
- Lee, A., Hobson, R. P., & Chait, S. 1994 I, you, and autism: An experimental study. *Journal of autism and developmental disorders*, 24(2), 155-176.
- Leung, E., H. & Rheingold, H., L. 1981 Development of pointing as a social gesture. *Developmental psychology*, 17(2), 215-220.
- Lotter, V. 1966 Epidemiology of autistic conditions in young children - 1. Prevalence. *Social psychiatry*, 1(3), 124-135.
- Loveland, A., K.& Landry, S., H. 1986 Joint attention and language in autism and developmental language delay. *Journal of autism and developmental disorders*, 16(3), 335-349.
- Mead, H. G. 1934 *Mind, self, and society; from the standpoint of a social behaviorist*. The university of chicago press. 稲葉三千男・滝沢正樹・中野 収訳 1973 精神・自我・社会 現代社会学体系第10巻 青木書店
- Millward, C., Powell, S., Messer, D., & Jordan, R. 2000 Recall for self and other in autism: Children's memory for events experienced by themselves and their peers. *Journal of autism and developmental disorders*. 30(1), 15-28.
- Minkowski, E. 1953 *La schizophrénie: psychopathologie des schizoïdes et des schizophrénie*. 村上 仁訳 1954 精神分裂病：分裂性性格者及び精神分裂病者の精神病理学 みすず書房
- 森口奈緒美 2002 平行線—ある自閉症者の青年期の回想 プレーン出版
- 森田理香 2005 高機能自閉症における自己理解：評価的側面に注目して 日本心理臨床学会第24回大会発表論文集, 280.
- Mundy, P., Sigman, M., & Kasari, C. 1990 A longitudinal study of joint attention and language development in autistic children. *Journal of autism and developmental disorders*, 20(1), 115-128.
- 村上靖彦 2008 流れない時間 51-75. 村上靖彦著 自閉症の現象学 頸草書房
- Neisser, U. 1988 Five kinds of self-knowledge. *Philosophical psychology*, 1(1), 35-59.
- Neisser, U. 1993 The self perceived. In Neisser, U. (Ed.) *The perceived self: ecological and interpersonal sources of self knowledge*. New York: Cambridge University Press, 3-21.
- Neisser, U. 1995 Criteria for an ecological self. pp17-34. Philippe, R. (Ed) *The self in infancy: theory and research*. Elsevier Science B. V.
- 野村香代・別府 哲 2005 高機能自閉症児における自己概念の発達 日本特殊教育学会第43回大会発表論文集, 406.
- 岡 潔 2006 高機能広汎性発達障害児の自己理解に関する研究：SPPCによる自己評定と自己に関するインタビューを通して 日本特殊教育学会第44回大会発表論文集 490.
- 岡本裕子 2002 ライフサイクルとアイデンティティ 岡本裕子(編著) アイデンティティ生涯発達論の射程 ミネルヴァ書房 3-57.
- Perner, J., Frith, U., Leslie, A. M., & Leekam, S. R. 1989 Exploration of the autistic child's theory of mind: Knowledge, belief, and communication. *Child development*, 60, 689-700.
- Ramondo, N. & Milech, D. 1984 The nature and specificity of the language coding deficit in autistic children.

- British journal of psychology, 75, 95-103.
- Rumsey, J. M., Rapoport, J. L., & Sceery, W. R. 1985 Autistic children as adults: Psychiatric, social, and behavioral outcomes. *Journal of the american academy of child psychiatry*, 24(4), 465-473.
- Russel, J. & Jarrold, C. 1999 Memory for actions in children with autism: self and other. *Cognitive neuropsychiatry*, 4(4), 303-331.
- Rutter, M. 1968 Concepts of autism: a review of research. *Journal of child psychology and psychiatry and Allied Disciplines* 9 (1), 1-25.
- 佐久間(保崎)路子・遠藤利彦・無藤隆 2000 幼児期・児童期における自己理解の発達: 内容的側面と評価的側面に着目して *発達心理学研究*, 11(3), 176-187.
- 杉村和美 1998 青年期におけるアイデンティティの形成—関係性の観点からのとらえ直し *発達心理学研究*, 9(1), 45-55.
- 杉山登志郎 1994 自閉症に見られる特異な記憶想起現象—自閉症の time slip 現象 *精神経誌*, 96, 281-297.
- 杉山登志郎・辻井正次 1999 高機能広汎性発達障害 アスペルガー症候群と高機能自閉症 プレーン出版.
- Tager-Flusberg, H. 1985 The conceptual basis for referential word meaning in children with autism. *Child development*, 56(5), 1167-1178.
- 高木隆郎 2009 児童分裂病と早期幼児自閉症 高木隆郎(編) 自閉症—幼児期精神病から発達障害へ— pp1-8. 東京: 星和書店
- 十一元三・神尾陽子 1998a 自閉症の言語性記憶に関する研究 *児童青年精神医学とその近接領域*, 39(4), 364-373.
- 十一元三・神尾陽子 1998b 間接プライミングを用いた自閉症の言語連想の研究 *精神医学*, 40(6), 623-628.
- 十一元三・神尾陽子 2001 自閉症者の自己意識に関する研究 *児童青年精神医学とその近接領域*, 42(1), 1-9.
- Tulving, E. 1972 Episodic and semantic memory. In Tulving, E. & Donaldson, W. (eds.) : *Organization of memory* (pp.381-403). Academic Press.
- Wheeler, M., Stuss, T. D., & Tulving, E. 1997 Toward a theory of episodic memory: the frontal lobes and auto-nocuous consciousness. *Psychological bulletin*, 121, 331-354.
- Williams, D. 1992 *Nobody nowhere*. Transworld Publishers, London. 河野万里子訳 1993 自閉症だったわたしへ 新潮社
- Wing, L. 1991 The relationship between Asperger's syndrome and Kanner's autism. In Frith, U. (Ed.) *Autism and Asperger syndrome*, pp93-121. Cambridge University Press. 富田真紀訳 1996 アスペルガー症候群とカナーの古典的自閉症 フリス・ウタ編著 自閉症とアスペルガー症候群 pp179-222. 東京書籍
- Wing, L. 1996 *The autistic spectrum: A guide for parents and professionals*. Constable.
- Wing, L. 1997 The history of ideas on autism - Legends, myths and reality. *Autism*, 1(1), 13-23.
- Wing, L. & Gould, J. 1979 Severe impairments of social interaction and associated abnormalities in children: Epidemiology and classification. *Journal of autism and developmental disorders*, 9 (1), 11-29.
- 山本淳子・田上不二夫 2003 思春期における自己概念と自尊感情との関連 *筑波大学心理学研究*, 25, 149-161.
- 山内直美・納富恵子・木谷秀勝・吉田敬子 2003 高機能広汎性発達障害児の自己評価に関する研究 *児童青年精神医学会第回大会発表論文集*, 219.

【註】

- 1 当時の精神分裂病 (Schizophrenia) は、現在では統合失調症と訳される。
- 2 後に Wing (1996) は、④形式ばった大仰な (over-formal, stilted) 群の存在も指摘した。
- 3 Asperger は第二次世界大戦の敗戦国であるオーストリアの小児科医であり、この報告は第二次世界大戦中にドイツ語で執筆された。
- 4 Self-perception or self-monitoring or self-concept or self-efficacy or self-regulation or self-evaluation or self-confidence or self-control or self-report or self-esteem
- 5 私的自己とは、自分自身の思考や意図は自分自身しか体験し得ず、他者の思考や意図とは直接的に異なる独自のものであるという意識を持つことによって生起するものである (Neisser, 1988)。この観点から、ASD 者における誤信念課題の不通過を考えた場合、他者が事実とは異なる誤った信念を持つことへの理解に ASD 者が失敗することは、自分自身の知識が自己に特有のものではなく、自分自身が知っているならば他者も知っているだろうと考えていることが推測される。よって、ASD 者が誤信念課題に失敗する要因のひとつに、私的自己の脆弱さが示唆される。

Trends and Issues of the Concept of the Self in People with Autistic Spectrum Disorder

Michika TAKIYOSHI

(Post Doctoral Researcher, Graduate School of Education, Tohoku University)

Mari TANAKA

(Associate Professor, Graduate School of Education, Tohoku University)

It is known that a person's concept of the "self" is formed through relationships with others. Therefore, how can people with the autistic spectrum disorder (ASD), who have difficulties in building and maintaining relationships with others, develop a concept of the self? We reviewed previous research on the concept of the self of people with ASD. We focused on "the self as object" classified the self into the "remembered self" and the "conceptual self". Related to the former, we reviewed studies on semantic and episodic memory of people with ASD. Related to the later, we reviewed studies related to the quantitative measurement of self-evaluation and self-esteem, as well as studies on the qualitative analysis of self-understanding and self-recognition. It is suggested that people with ASD have difficulties in connecting with the "remembered self" and the "conceptual self". Therefore, it is important to support their mental effort to recall past experiences and create meaning.

Key words : autistic spectrum disorder, self

